

不確定特異点をもつ偏微分作用素の超局所解析

東大理 打越敬祐

$t \in \mathbb{R}$ とし、常微分作用素

$$L = t^{K(m)} \frac{d^m}{dt^m} + \sum_{j=0}^{m-1} t^{K(j)} a_j(t) \frac{d^j}{dt^j}$$

を考える。ここで、 $K(0), \dots, K(m)$ は非負の整数とし、係数 $a_0(t), \dots, a_{m-1}(t)$ は原点で解析的な函数とし、また

$$a_j(0) \neq 0 \quad 0 \leq j \leq m-1$$

と仮定する。さて、青木 [1] に従って、 L の不確定度 $\varkappa = \varkappa(L)$ を、

$$(1) \quad \varkappa(L) = \max \left\{ \max_{0 \leq j \leq m-1} \left(\frac{K(m) - K(j)}{m-j} \right), 1 \right\}$$

によって定義する。容易にわかるように、 $\varkappa = 1$ (resh. $\varkappa \neq 1$) のとき L は原点に確定特異点 (resh. 不確定特異点) をもつ。このような常微分作用素については、青木 [3]、相原 [4] により、次のことが示されている： $t^* = (0; \sqrt{-1}) \in \mathbb{R}T^*\mathbb{R}$

において, L は超局所的には標準型 $x_0^{k(m)}$ と同等と考えられ, この点で,

$$\text{Ker}_c L \simeq \bigoplus_{k(m)} \mathbb{C}, \quad \text{Cok}_c L = 0$$

である。

本稿の目的は, この結果を偏微分作用素に拡張することである。 $M = \mathbb{R} \times \mathbb{R}^n$ とし, M の変数を $x = (x_0, x')$ と書く。 $k(0), \dots, k(m)$ を非負の整数として, 偏微分作用素

$$P = \sum_{k \leq m} x_0^{k(1)} a_k(x) \partial_x^k$$

を考える。但し, $a_k(x)$ は $x = 0$ で解析的な函数とし,

$$\begin{cases} a_{(m, 0, \dots, 0)} = 1 \\ a_k(0, x') \neq 0 \end{cases}$$

としておく。このとき, P の不確定度 $\zeta = \zeta(P)$ を, (1) で定義する。 $\zeta = 1$ (resp. $\zeta \neq 1$) のとき, P は超平面 $N = \{x \in M; x_0 = 0\}$ に確定特異点 (resp. 不確定特異点) を持つ, ということにする。

$\zeta = 1$ の場合, 常微分作用素と類似の結果は柏原-大島[5]によって得られている。 $x^* = (0; \sqrt{-1}, 0, \dots, 0) \in \sqrt{-1} T^* \mathbb{R}^m$ において, P は超局所的には標準型 $x_0^{k(m)}$ と同等なのである。

2.1 の場合については、筆者[8]により初めてこういう結果が得られたので、以下その概要を紹介する。まず主要結果を述べるため、次の定義を与えておく。

定義 2.1 とする。 $x^* = (0, \sqrt{1}, 0, \dots, 0) \in \sqrt{1} T^* \mathbb{R}^{n+1}$ における P の特性指数とは、方程式

$$\lambda^{k(m)} + \sum_{\pi(I)} a_{(j, 0, \dots, 0)}(0) \lambda^{k(j)} = 0$$

の根のことである。但し、

$$\pi(I) = \left\{ 0 \leq j \leq m-1; \frac{k(m) - k(j)}{m-j} = 2 \right\}$$

とする。 \square

2.1 としたので、上の代数的方程式は λ に関する $k(m)$ 次方程式である。その根を、重複度も込めて、 $\lambda = \lambda_1, \dots, \lambda_{k(m)}$ とする。

主要結果は、次のとおり。

定理 1. 2.1 とし、 P の特性指数は全て相異なるとする。このとき、

$$Q_1(x, D), \dots, Q_{k(m)}(x, D) \in \mathcal{E}_{x^*}^{\mathbb{R}}$$

が存在して、

$$0 \rightarrow \bigoplus_{k(m)} (\delta(x) \otimes B_N) \xrightarrow{(Q_1, \dots, Q_{k(m)})} \mathcal{E}_M \xrightarrow{P} \mathcal{E}_M \rightarrow 0$$

は x^* で層の意味で完全である。 \square

さて, $u, f \in \mathcal{E}_M$ に対して, $K(m)$ -縦ベクトル \vec{u}, \vec{f} を

$$\vec{u} = \begin{pmatrix} 1 \\ D_0^{1/2} x_0 \\ \vdots \\ (D_0^{1/2} x_0)^{K(m)-1} \end{pmatrix} \begin{pmatrix} u \\ u \\ \vdots \\ u \end{pmatrix}$$

$$\vec{f} = \begin{pmatrix} 0 \\ \vdots \\ 0 \\ f \end{pmatrix}$$

とする。このとき, $Pu = f$ という方程式は,

$$\{x_0 I_{K(m)} + A(x, D)\} \vec{u} = \vec{f}$$

と書き直せる。但し, $A(x, D)$ は $-\frac{1}{2}$ 階の (分数べき) 擬微分作用素の $K(m) \times K(m)$ 行列である。ところで, 定義から α は有理数 ≥ 1 なので, $1 \leq p \leq q$ なる互いに素な整数 p, q が存在し, $\alpha = q/p$ である。今は $\alpha \geq 1$ としているので, 更に $p \leq q$ である。そして, $A(x, D)$ の完全表象 $\sigma(A)(x, \xi)$ は, 青木[2]の意味で,

$$\sigma(A)(x, \xi) \sim \sum_{j=-p/q, -(p+1)/q, \dots} A_j(x, \xi)$$

という形に漸近展開される。また, A の主表象 $A_{-p/q}(x, \xi)$ の固有値を, $\mu_j(x, \xi)$, $1 \leq j \leq K(m)$ とすると,

$$-\mu_j(x, \xi) \Big|_{x=0, \xi=0} = \lambda_j \xi_0^{-p/q} \quad 1 \leq j \leq K(m)$$

となる。従って, ξ^* の近くでは, これらは全て相異なる, ということが仮定されている。

さて，定理1 は次のことからたやすく導かれる。

定理2、上の条件のもとで，作用素として可逆な行列

$$E(x', D), F(x, D) \in M(K(m), \Sigma \mathcal{R}_{x^*})$$

が存在して，

$$E(x', D) \{ x_0 I_{K(m)} + A(x, D) \} F(x, D) = x_0 I_{K(m)}$$

を満たす。□

この定理の証明の概略を述べて，本稿を終める。まず，

$$\sigma(W) \sim I_{K(m)} + \sum_{j=-1/q, -2/q, \dots} W_j(x, \xi)$$

という漸近展開が定める分数べき擬微分作用素の $K(m) \times K(m)$ 行列 $W(x, D)$ によって，

$$\{ x_0 I_{K(m)} + A(x, D) \} W(x, D) = x_0 I_{K(m)} + B(x', D)$$

但し，

$$\sigma(B)(x', \xi) \sim \sum_{j=-1/q, -(1+1/q), \dots} B_j(x', \xi)$$

$$B_{-1/q}(x', \xi) = A_{-1/q}(0, x', \xi)$$

のようにできる (Weierstrass の割算定理)。そこで， $A(x, D)$ の代わりに， $B(x', D)$ を考えればよい。

さて，

$$E(x', D) \{ x_0 I_{K(m)} + B(x', D) \} = x_0 I_{K(m)} E(x', D)$$

なる可逆行列 $E(x', D)$ を見つければ, $F(x, D) = E^{-1}(x', D)W(x, D)$ であるが, $E(x', D)$ の満たすべき方程式は,

$$\frac{d}{d\xi_0} \sigma(E)(x', \xi) + \sigma(EB)(x', \xi) \sim 0$$

である。これはおおざっぱに言って, (x', ξ') を parameter に持つ, ξ_0 に関する常微分方程式で, $\xi_0 \rightarrow \infty$ での振舞いを調べることが重要である。このため, 常微分方程式の古典理論から, Turnittin [4] の方法を援用する。

第1段

可逆行列

$$\sigma(T)(x', \xi) = \sum_{j=0, -1/2, \dots, -(s-1)/2} T_j(x', \xi)$$

が存在して,

$$\begin{aligned} T(x', D) \{ x_0 I_{K(m)} + B(x', D) \} T^{-1}(x', D) \\ = x_0 I_{K(m)} + C(x', D) \end{aligned}$$

但し,

$$\sigma(C)(x', \xi) \sim \sum_{j=-1/2, -3/2, \dots} C_j(x', \xi)$$

で, $C_j(x', \xi)$ は $-1/2 \geq j \geq -1$ のとき対角行列である。

第二段(その1)

$C'(x, D)$ を,

$$\sigma(C')(x, \xi) = \sum_{-1/2 \leq j \leq -1} C_j(x, \xi)$$

で定めると, これは対角行列である。 $x_0 I_{K(m)} + C(x, D)$ を,
 $x_0 I_{K(m)} + C'(x, D)$ に変換する。それとは,

$$\begin{aligned} (R) \quad & \{ x_0 I_{K(m)} + C(x, D) \} D_0^{(z-z_0)/\delta} U(x, D) \\ & = D_0^{(z-z_0)/\delta} U(x, D) \{ x_0 I_{K(m)} + C'(x, D) \} \end{aligned}$$

とすればよい。 U を逐次近似で解く。いま, $U^{(z)}(x, \xi)$, $z = 0, 1, 2, \dots$ を,

$$\begin{aligned} (B)_z \quad & \frac{\partial}{\partial \xi_0} U^{(z)} + \frac{z-1}{\delta} \xi_0^{-1} U^{(z)} - \sigma(C') U^{(z)} + U^{(z)} \sigma(C') \\ & = \sum_{(k, s, z') \in \Pi_1(z)} \frac{1}{s!} \partial_{\xi'}^s C_k(x, \xi) \partial_{x'}^s U^{(z')}(x, \xi) \\ & - \sum_{(k, s, z') \in \Pi_2(z)} \frac{1}{s!} \partial_{\xi'}^s U^{(z')}(x, \xi) \partial_{x'}^s C_k(x, \xi) \end{aligned}$$

とする。但し, $\mathbb{Z}_+ = \{0, 1, 2, \dots\}$ とし,

$$\begin{aligned} (4)_z \quad \Pi_1(z) & = \{ (k, s, z') \in \frac{1}{\delta} \mathbb{Z} \times (\mathbb{Z}_+)^n \times \mathbb{Z}_+; \\ & \quad k - |s| - \frac{z'}{\delta} = -\frac{z}{\delta} - 1, \quad |k| + |s| \geq 1 \} \end{aligned}$$

$$\begin{aligned} (5)_z \quad \Pi_2(z) & = \{ (k, s, z') \in \frac{1}{\delta} \mathbb{Z} \times (\mathbb{Z}_+)^n \times \mathbb{Z}_+; \\ & \quad k - |s| - \frac{z'}{\delta} = -\frac{z}{\delta} - 1, \quad k \geq -1, \quad s \neq 0 \} \end{aligned}$$

ここで、(A)_i と (B)_i が、

$$(R, S, z') \in \pi_1(z) \text{ or } \pi_2(z) \Rightarrow z' \leq z-1$$

となる。従って、(B)_i は z について帰納的に解ける。さて、 $\tau = \xi_0^{-1/2}$ として、 $U^{(z')}(x', \xi)$ に $\xi_0 = \tau^2$ を代入したものの同じ記号 $U^{(z')}(x', \tau, \xi')$ で表わすことにすると、(B)_i は、

$$\begin{aligned} (b)_i & \frac{\partial}{\partial \tau} U^{(z')}(x', \tau, \xi') + (\delta - p) \tau^{-1} U^{(z')}(x', \tau, \xi') \\ & - \delta \tau^{\delta-1} \left\{ \sigma(C')(x', \tau, \xi') U^{(z')}(x', \tau, \xi') \right. \\ & \quad \left. - U^{(z')}(x', \tau, \xi') \sigma(C')(x', \tau, \xi') \right\} \\ & = \delta \tau^{\delta-1} \sum_{\pi_1(z)} \frac{1}{\delta!} \partial_{\xi'}^{\delta} C_R(x', \tau, \xi') \partial_{x'}^{\delta} U^{(z')}(x', \tau, \xi') \\ & \quad - \delta \tau^{\delta-1} \sum_{\pi_2(z)} \frac{1}{\delta!} \partial_{\xi'}^{\delta} U^{(z')}(x', \tau, \xi') \partial_{\xi'}^{\delta} C_P(x', \tau, \xi') \end{aligned}$$

となる。このとき、(b)_i の τ 及び ξ' に関する形式的べき級数としての形式解

$$(7)_i \quad U^{(z')}(x', \tau, \xi') = \sum_{\substack{\frac{\delta}{2} + k_1 \leq -\frac{z'+\delta-p}{2} \\ j \in \mathbb{Z}_-, \alpha \in (\mathbb{Z}_+)^n}} U_{j\alpha}^{(z')}(x') \tau^j \xi'^{\alpha}$$

が構成されて、

$$(8)_i \quad |U_{j\alpha}^{(z')}(x)| \leq C \cdot \frac{[-\frac{z'}{2-p}]! [\frac{z'}{2}]!}{[\frac{z'}{2-p}]! [\frac{z'}{2-p} + k_1]!} r^{j-k_1-z'} \quad \text{for } \exists C, r > 0$$

をみたす。これは発散級数だが、以下のような意味をもつ。

♯.

第2段(その2)

ここでは、簡単のため、 $\delta = \nu + 1$ として説明する。

$C_R(x', \tau, \xi')$ に対し、

$$\begin{cases} D_R = \tau^{\nu+1} C_R & R \leq -\nu/\delta \\ D_{-\nu/\delta} = \tau^{\nu+1} (C_{-\nu/\delta}(x', \tau, \xi') - C_{-\nu/\delta}(x', \tau, 0)) \end{cases}$$

とおく。また、

$$\overline{C_{-\nu/\delta}}(x') = \tau^{\nu+1} C_{-\nu/\delta}(x', \tau, 0)$$

とする。上の D_R ($R \leq -\nu/\delta$) は、 $\forall (x', \xi') \in \mathbb{C}^n$ を fix するとき、 $\operatorname{Im} \tau = \left(\frac{1}{2R} (1 + |\xi'|^2)\right)^{1/2}$ ($R > 0$ は小さな数) にとって、 $\operatorname{Re} \tau \in \mathbb{R}$ の函数とみて $L^2(\mathbb{R})$ に属するので、 $t \in \mathbb{R}$ として、

$$\widehat{D}_R(x', t, \xi') = \int_{\operatorname{Im} \tau = \left(\frac{1}{2R} (1 + |\xi'|^2)\right)^{1/2}} e^{-\sqrt{t} \tau} D_R(x', \tau, \xi') d\tau$$

が定義できる。ところが実は、

$$\widehat{D}_R(x', t, \xi') = \widetilde{D}_R(x', t, \xi') \chi(t)$$

であって、ここで $\widetilde{D}_R(x', t, \xi')$ は $\forall (x', t, \xi') \in \mathbb{C}^n \times \mathbb{C} \times \mathbb{C}^n$; $|x'| < \varepsilon_4$ で正則で、 $\exists a, \exists R > 0$ が存在して、

$$(9) \quad \left| \partial_{\xi'}^s \widetilde{D}_R(x', t, \xi') \right| \leq a \exp\left(R^{-1} (1 + |\xi'|^2)^{1/2} |t|\right) \times \\ \times [k! + |s|]! R^{-R + |s|} \frac{k!^{\nu k + \delta |s| - \delta}}{(\delta k + \delta |s| - \delta)!}$$

及び、 $R \geq -1$ のときは、

$$(10) \quad |\hat{D}_r(x', t, \xi')| \leq C \cdot (1+|\xi'|)^{(2-\delta)/2} \exp(R^{-1}(1+|\xi'|)^{1/2}|x'|)$$

をみたす。さて、形式べき級数 $\hat{U}^{(2)}(x', t, \xi')$ の形式的な

Laplace変数 $\hat{U}^{(2)}(x', t, \xi')$ を、 $t \in \mathbb{R}$ として、

$$\left\{ \begin{aligned} \hat{U}^{(2)}(x', t, \xi') &= -2\pi\sqrt{t} \hat{U}^{(2)}(x', t, \xi') \gamma(t) \\ \hat{U}^{(2)}(x', t, \xi') &= \sum_{\substack{j \geq 0 \\ \frac{j}{2} + |\delta| \leq -\frac{2+1}{2}}} U_{j\alpha}^{(2)}(x') \frac{(-\sqrt{t})^{-j-1}}{(-j-1)!} \xi'^{-\alpha} \end{aligned} \right.$$

とする。このとき、(8) $_{j\alpha}$ から、 $k=1/2$ で $\hat{U}^{(2)}$ は収束し、

$$(11)_i \quad |\partial_{\xi'}^{\delta} \hat{U}^{(2)}(x', t, \xi')| \leq C \cdot \frac{[\frac{\delta}{2} + |\delta|]! r^{-2+|\delta|}}{(2+\delta|\delta|)!} |x'|^{2+\delta|\delta|} \times \exp(R^{-1}(1+|\xi'|)^{1/2}|x'|)$$

をみたす。よって、 $-0 \leq t \leq +r/2$ で、 $\hat{U}^{(2)}$ は式(11)_i を変換した式

$$(12)_i \quad \sqrt{t} \hat{U}^{(2)}(x', t, \xi') + \frac{1}{\sqrt{t}} \int_0^t \hat{U}^{(2)}(x', s, \xi') ds$$

$$- \gamma(\bar{D}_{-1/\sqrt{t}}(x') \hat{U}^{(2)}(x', t, \xi') - \hat{U}^{(2)}(x', t, \xi') \bar{D}_{-1/\sqrt{t}}(x'))$$

$$- \frac{\gamma}{2\pi\sqrt{t}} \int_0^t \{ \hat{D}'(x', s, \xi') \hat{U}^{(2)}(x', t-s, \xi')$$

$$- \hat{U}^{(2)}(x', t-s, \xi') \hat{D}'(x', s, \xi') \} ds$$

$$= - \frac{1}{2\pi\sqrt{t}} \sum_{\pi_3(\delta)} \frac{1}{\delta!} \partial_{\xi'}^{\delta} U^{(2)}(x', t, \xi') \partial_{x'}^{\delta} \bar{D}_{-1/\sqrt{t}}(x') + (\text{続く})$$

$$\begin{aligned}
 & \text{(続き)} + \frac{\sqrt{z}}{2\pi} \sum_{\pi_1(z)} \frac{1}{s!} \int_0^t \partial_{z'}^s \widehat{D}_R(x', s, \xi') \partial_{z'}^s \widehat{U}^{(z')} (x', t-s, \xi') ds \\
 & - \frac{\sqrt{z}}{2\pi} \sum_{\pi_2(z)} \frac{1}{s!} \int_0^t \partial_{z'}^s \widehat{U}^{(z')} (x', t-s, \xi') \partial_{z'}^s D_R(x', s, \xi') ds
 \end{aligned}$$

の真の解である。但し,

$$\widehat{D}' = \sum_{-1/2 \leq \lambda \leq -1} \widehat{D}'_{\lambda}$$

及び

$$\pi_3(z) = \{(z', s) \in \mathbb{Z}_+ \times (\mathbb{Z}_+)^n; z' + s|s| - 1 = z'\}$$

とした。

以下、簡単のため、^{対角行列} $\overline{D}_{-1/2}(\alpha')$ の (μ, μ) 成分 $\overline{D}_{-1/2, (\mu)}(\alpha')$ は、

$$\mu \neq \nu \Rightarrow \arg(\overline{D}_{-1/2, (\mu)}(\alpha') - \overline{D}_{-1/2, (\nu)}(\alpha')) \neq \frac{\pi}{2}$$

とする。このとき、 $(z', s) \in \pi_3(z)$ でも $z' \leq z - 1$ なので、 $\widehat{U}^{(z)}$ に関する第 3 種 Volterra 型積分方程式 (2)_i は、 z について帰納的に、 $t \in \mathbb{R}$ 全体において解ける。更に、(9)、(10) を用いて、 $t \in \mathbb{R}$ のとき、(11)_i と類似の評価

$$(13)_i \quad |\widehat{U}^{(z)}(x', t, \xi')| \leq c \cdot r^{-z} \exp(r^{-1}(|H|\xi')^{\lambda} |H|) \frac{[\frac{z}{2}]! |H|^z}{z!}$$

を得る。そこで、

$$U^{(z)}(x', t, \xi') = \frac{1}{2\pi} \int_{\mathbb{R}} \widehat{U}^{(z)}(x', t, \xi') e^{\sqrt{\pi} t \tau} d\tau$$

は, $\ln \tau \geq 2r^{-1}(1+|\xi_0|)^{1/2}$ で well-defined で, (6)₂ の真の解であって,

$$|v^{(i)}| \leq C_1 r^{-i} \varepsilon^{-i} \left[\frac{2}{\eta}\right]! |\tau|^{-i + \frac{1}{2}}$$

$\tau = \xi_0^{1/2}$ から,

$$|v^{(i)}(x', \xi)| \leq C_1 (r\varepsilon)^{-i} \left[\frac{2}{\eta}\right]! |\xi_0|^{-i + \frac{1}{2}}$$

on $\Omega = \{(x', \xi) \in \mathbb{C}^n \times \mathbb{C}^{n+1};$

$$|x'| \leq \varepsilon, \frac{2}{3}\pi < \arg \xi_0 < \frac{2\pi}{3},$$

$$|\xi_0| > \left(\frac{2r}{2+\varepsilon}\right)^2 (1+|\xi_0|) \}$$

となり,

$$\sigma(v) \sim \sum_{i=0}^{\infty} v^{(i)}$$

は 0 階の擬微分作用素を定め, (6) を満たす。更に,

$$v^{(0)} = \xi_0^{-1/2}$$

であり, $i=1, 2$ のときは, $v^{(i)}$ が (7)₂ の形の漸近展開をもつことから, $|v^{(i)}| \leq \exists C_1 \xi_0^{-1/2 - i/2}$ を得る。よって, $v(x', 0)$ は可逆な作用素である。

ここまでの議論は 0 階の作用素しか使わないことを注意しておく。 η, ρ が一般のときも本質的には同様である。

第3段

対角行列 $x_0 I_{k(m)} + C'(x', D)$ を $x_0 I_{k(m)}$ に変換する。この際, 無限階作用素を用いる。一般に, 無限階作用素の計算

R.

は困難であるが、いまは対角行列を扱うので、計算が可能になる。まず、 $X(x', D_0) \in M(K(m); \mathcal{E}^{\mathbb{R}})$ を、

$$\sigma(X)(x', \xi_0) = \sum_{j=1-\frac{1}{p}, 1-\frac{m}{p}, \dots, \frac{1}{p}} X_j(x') \xi_0^j + X_0(x') \log \xi_0$$

とする。但し、 $X_j(x')$ は適当な対角行列とする。このとき、 $X(x', D_0)$ は無限階作用素であるが、可逆な行列で、

$$X^{-1}(x', D_0) \{ x_0 I_{K(m)} + C'(x', D) \} X(x', D_0)$$

は、0階の作用素になってしまう。更上、これは詳しく調べることができて、 $X_j(x')$ を適当に決めてやれば、

$$\begin{aligned} & X^{-1}(x', D_0) \{ x_0 I_{K(m)} + C'(x', D) \} X(x', D_0) \\ &= x_0 I_{K(m)} + C''(x', D) \end{aligned}$$

但し、

$$\sigma(C'') = \sum_{j=-\frac{2}{p}, -\frac{2+1}{p}, \dots, -1} C''_j(x', \xi) + C'''(x', \xi)$$

しかも C''_j は ξ について j 次齊次で、

$$C''_j(x', \xi_0, 0) = 0,$$

また

$$|C'''(x', \xi)| \leq \text{const.} |\xi_0|^{-1-\frac{1}{p}}$$

とできる。まとめて、

$$(A) \quad |\sigma(C'')(x', \xi)| \leq \text{const.} |\xi_0|^{-1-\frac{1}{p}} (1+|\xi|).$$

そこで、 $j = 0, 1, 2, \dots$ に対して、 $Z^{(j)}(x', \xi)$ を次のよう

に決めてやる:

$$Z^{(0)} = I_{\kappa(m)}$$

$$Z^{(j)}(x, \xi) = \sum_{\substack{j+|\delta|+|\eta|=2 \\ j' \in \mathbb{Z}_+ \\ \delta \in (\mathbb{Z}_+)^n}} \frac{1}{\delta!} \int_{\xi_0}^{\xi} \partial_{\xi'}^{\delta} \sigma(c'')(\alpha; \xi) \partial_{x'}^{\delta} Z^{(j-1)}(\alpha; \xi) d\xi_0$$

すると, $\exists C, \exists r > 0$ が存在して, $\varepsilon \in \mathbb{R}^+$ が小さくするとき,

$$|Z^{(j)}(x, \xi)| \leq C \cdot r^{-2} |\xi_0|^{-2} z! \exp(|\xi_0|^{1-\frac{1}{r}})$$

$$\text{on } \{ (x, \xi) \in \mathbb{C}^n \times \mathbb{C}^{n+1}; |x| < \varepsilon, |\xi| < \varepsilon |\xi_0|$$

$$|\Re \xi_0| < \varepsilon \wedge \Im \xi_0, \varepsilon |\xi| > 1 \}$$

が成立する。従って,

$$\sigma(Z)(x, \xi) \sim \sum_{j=0}^{\infty} Z^{(j)}(x, \xi)$$

なる $Z(x, D) \in M(\kappa(m), \varepsilon^{\mathbb{R}})$ が存在して,

$$\{ \chi_0 I_{\kappa(m)} + C''(x, D) \} Z(x, D) = Z(x, D) \chi_0 I_{\kappa(m)}.$$

Z の逆作用素は,

$$\tilde{Z}(x, D) \{ \chi_0 I_{\kappa(m)} + C''(x, D) \} = \chi_0 I_{\kappa(m)} \tilde{Z}(x, D)$$

なる \tilde{Z} を同様に構成することができて,

$$Z \tilde{Z} = \tilde{Z} Z = I_{\kappa(m)}$$

となる。

これで, 定理 2 が示された。

この論説の詳細は, 打越[8] に発表される。なお, 打越[7]

の中で, Theorem 7. として, 本稿の 定理 1. が述べられているが, 完全図式が

$$0 \rightarrow \bigoplus_{k(1)} (\delta(\lambda_0) \otimes \mathcal{A}_N) \xrightarrow{(R_1, \dots, R_{k(1)})} \mathcal{E}_M \xrightarrow{P} \mathcal{E}_M \rightarrow 0$$

となっている。 \mathcal{A}_N は \mathcal{A}_N の誤りなので, この場をお借りして訂正したい。

文献

- [1] 青木貴史: Growth order of microdifferential operators of infinite order. (to appear in J Fac. Sci. Univ. Tokyo, Sect. IA.)
- [2] 青木貴史: Invertibility for microdifferential operators of infinite order (to appear in Publ. RIMS)
- [3] 青木貴史: An invariant measuring the irregularity of a differential operator and a microdifferential operator (to appear in J. Math. Pures Appl.)
- [4] 柏原正樹: Systèmes d'équations microdifférentielles, (Univ. Paris-Nord 1976-1977 の講義)
- [5] 柏原正樹-大島利雄: Systems of differential equations with regular singularities and their boundary value problems (Ann. of Math., 106, 145-200, 1977).
- [6] H. L. Turrittin: Convergent solutions of ordinary linear differential equations in a neighborhood of an irregular singular point, (Acta Math. 93, 28-66, 1955).

- [7] 打越敬祐: Microlocal analysis of partial differential operators with irregular singularities, (Proc. Japan Acad. 57, Ser A, No. 70, 485-487, 1981)
- [8] 打越敬祐: Microlocal analysis of partial differential operators with irregular singularities, (to appear)